

平成 22 年 6 月 10 日現在

研究種目： 基盤研究(C)  
 研究期間： 2006 ～ 2009  
 課題番号： 18520267  
 研究課題名 (和文) 越境するロシア演劇—演劇の近代化とロシア型演劇システムの伝播  
 研究課題名 (英文) Transborder of Russian Theatre methods and Modernization of Theatre  
 研究代表者  
 楯岡 求美 (TATEOKA KUMI)  
 神戸大学・大学院国際文化科学研究科・准教授  
 研究者番号： 60324894

## 研究成果の概要 (和文)：

20 世紀初頭にロシアで作りに上げられた心理主義およびアヴァンギャルドの両演劇システムはジョルジュ・ピトエフ、フョードル・コミッサルジェフスキー、ミハイル・チェーホフ等ロシア亡命者によって伝えられた。ブロードウェイやハリウッドの演技をも含めて世界各国の現代演劇/映像表現に強い影響を与えている。それらは伝達者のオリジナルの少しずつ異なった解釈が伝えられた。近代の演劇はロシアの亡命演劇人の活動が伝えた俳優術の影響のもとに、各地で独自の発展を遂げ、グローバル化されている。

## 研究成果の概要 (英文)：

Acting methods of psychological realism and Avant-Garde theater in early 20th century Russia were transmitted to Europe and America by emigrant actors. These methods have influenced and are still influencing the theatres and cinemas of various countries all over the world, including Broadway and Hollywood. It is important to notice that the initial influences of the Russian emigrants have been interpreted in different ways and resulted in the quite different development of the theaters of various countries, each of which is now faced with the wave of globalization in its own way. To trace "the Russian influence" is, in a sense, to know the very process of the development of the world theater and cinema of 20th century.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,500,000	690,000	4,190,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学 (英文学を除く)

キーワード：ロシア演劇、越境、ジョルジュ・ピトエフ、フョードル・コミッサルジェフスキー、俳優術

1. 研究開始当初の背景

19 世紀から 20 世紀初頭のモダニズムの時

代、演劇もまた、新しい科学の時代に即した表現方法を模索していた。ロシアにおいては演劇の近代化が写実主義・心理主義的手法がモスクワ芸術座によって明確な形をとる一方で、その限界がメイエルホリドを筆頭とする一群の改革派から批判され、アヴァンギャルド演劇は心理主義に対する対抗であると考えられ、ロシア語という言語的および政治的な障壁から、近・現代演劇を考察する際、ロシアの演劇はエキゾチックなアヴァンギャルドか、確固として不変のシステムとしてのスタニスラフスキー・システムとしてエピソード的に扱われてきた。

## 2. 研究の目的

従来はエピソード的に扱われてきたロシア演劇が、さまざまな文化的・人的交流を通し、近代的演劇の展開に大きな影響をあたえていることを再考することを目的としている。

ミハイル・チェーホフがイギリスやアメリカに伝え、フォードル・コミッサルジェフスキーがイギリスに伝えるなどした20世紀初頭にロシアで作上げられた心理主義およびアヴァンギャルドの両演劇システムこそが、ブロードウェイやハリウッドの演技をも含めて世界各国の現代演劇/映像表現に強い影響を与えている。いわば、近代の演劇はロシアで確立したシステムを土台として、各地で独自の発展を遂げたことを検証する。

## 3. 研究の方法

メイエルホリド、スタニスラフスキーの演技観、およびゴードン・クレイグやラインハルトなどロシア以外の演劇との接触・影響関係および、ピトエフ、コミッサルジェフスキー、ミハイル・チェーホフの亡命先での活動に関する演劇資料の収集と分析を行った。

## 4. 研究成果

演出家フセヴォロド・メイエルホリド(1874-1940)は、様式化された日本の舞台表現の構造を研究し、応用した。彼が歌舞伎に見出した演劇の可能性は、(1)本物らしさという錯覚の拒否、(2)リズムによる統一感のある身体表現や型で構成する手法、(3)俳優(舞台)と客席の間を近づけること、である。このような演出は、ギリシャ演劇と、コメディ・デラルテなど、ヨーロッパの伝統とも実は共通である。歌舞伎を代表とする東洋の芸能に出会ったことが触媒となり、もともとメイエルホリドの中に蓄積されていた新しい演劇のイメージが華麗な展開を見せた。

一方、内戦後モスクワ芸術座がソヴィエト文化の使節として行った国外公演は近代的演技法の確立を印象付け、各地でその手法の導入が急務の課題とされる。その媒介者となったのが、ミハイル・チェーホフやニコライ・エヴレイノフ現在のグルジア出身でフランスでロシア演劇の手法を広め、フランス演劇の「四天王」とまで評価されたジョルジュ・ピトエフ、イギリスにおける演出の歴史を変えたと評価されているフォードル・コミッサルジェフスキー(1882-1954)など、ロシアからの亡命者であった。

コミッサルジェフスキーは、ロシア時代にはスタニスラフスキーと、メイエルホリド等アヴァンギャルド演劇との双方を批判し、「神秘主義的リアリズム」と名づけた象徴主義的色彩の濃い演出を提唱した。イギリスではスタニスラフスキーの後継者として受け入れられたが、実際にはメイエルホリド同様、戯曲の改変を、作品のイメージが変わるほどに行った。イギリスの観客に合わせると同時に、みずからのロマンチックで象徴主義的表現でチェーホフの世界を思い通りに表現し

たという側面も否めない。

ピトエフもフランスにおけるチェーホフ劇の紹介者として評価されている。コミッサルジェフスキーとちがい、原作テキストをそのまま上演したが、演出の面では、モスクワ芸術座的な手法を取り入れながらもメランコリックな雰囲気やロマンチックな側面を強調しつつ、象徴主義的表現であった。

20世紀初頭に芸術ジャンルの混交を特徴とするロシア・モダニズム期のアヴァンギャルド演劇においても、イギリスの演出家ゴードン・クレグおよびドイツの演出家ラインハルトの手法がロシアの演出手法の根本に強い影響を与えている。また、亡命者の問題として、ユダヤ系の芸術家たちの役割も重要である。ショレム・アレイヘム原作の『牛乳屋テヴィエ』は革命期のユダヤ人劇場における民族的表現の発露となったとともに、後にはヨーロッパからアメリカへと流れ込んでいった亡命者たちによってブロードウェイでミュージカル化され、さらにはハリウッドで映画化された。このような作品で使われたユダヤの民間音楽であるクレズマーのメロディーはハリウッド映画のベースとして世界的に受容されていった。このようなロシア・ソ連からアメリカ・ハリウッドへの伝播は俳優術のユニヴァーサル化とも連動し、ミハイル・チェーホフらによって国外へと伝承されたスタニスラフスキー・システムが、現在の演技術の規範となっている。

ミハイル・チェーホフの演技メソッドについては、シュタイナーの人智学に心酔したというエピソードから、とかく神秘化され、シュタイナーの理念に基づいて解釈されることが多かった。しかし、チェーホフとスタニスラフスキーとの演技間の齟齬は、スタニスラフスキーが俳優の個人的感情・感覚の体験に演技の根拠を見出そうとしたのに対し、

チェーホフは特殊個人的な体験ではなく、その感覚を客観化し、分類・分析することを求めている。チェーホフにおいては人物像のある種の典型化が行われており、身体表現を記号化するメイエルホリドの手法にも通じる側面がある。

このように、近代演劇の展開は他の文化同様、さまざまな思想的模索と対立が徐々に統合される形でグローバル化され、ハリウッド、ブロードウェイなどのグローバルメディアによって再分配され、更新され続けている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①楯岡求美「レールモントフ『現代の英雄』におけるメタシアター的構造」『ロシア語ロシア文学研究』第39号(日本ロシア文学会)、2007年、100-107頁。
- ②楯岡求美「イメージーションの祝祭—メイエルホリドが歌舞伎に見たもの」『国文学』1月号、学鐙社、2007年1月、84-87頁。
- ③楯岡求美「ロシア芸術のいま4 演劇」北日本新聞 2006年7月26日号、18頁。

[学会発表] (計0件)

[図書] (計3件)

- ①沼野充義編著『芸術はなにを超えていくのか?』(未来を拓く人文・社会科学 15)東信堂、2009年3月。(楯岡求美「『祖国』って持ち運べますか?」119-129頁)。
- ②望月哲男編著『創像都市ペテルブルグ—歴史・科学・文化』北海道大学出版会、2007年。(楯岡求美「ナルキッソスの水に映る街—劇場都市ペテルブルグ」211-240頁)。

③井上優・楯岡求美編著『近代演劇と越境  
(2) ピトエフ／コミッサルジェフスキー  
／レーミゾフ／ラインハルト／クレイグ』  
(日本学術振興会「人文・社会振興のための  
プロジェクト」研究領域V-1「伝統と越境—  
とどまる力と越えゆく流れのインタラクシ  
ョン」第2グループ「越境と多文化」研究報  
告集No.8)、2009年。共著(井上優、村田真  
一、安宅りさ子、小椋彩)全76頁。

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

楯岡 求美 (TATEOKA KUMI)

神戸大学・大学院国際文化科学研究科

研究者番号：60324894

### (2) 研究分担者

なし